

TOKYO CULTURE CREATION PROJECT

NEWS
LETTER
Vol.2

平成 23 年 11 月 14 日
東京文化発信プロジェクト室
(公益財団法人東京都歴史文化財団)

当プレスニュースレターでは、東京文化発信プロジェクトの多様な事業を、さまざまな切り口からご紹介しています。

「東京クリエイティブ・ウィーク」活動報告

この秋、東京文化発信プロジェクトでは、初の取り組みとして、10月20日(木)～10月30日(日)の11日間を『東京クリエイティブ・ウィーク』を開催し、子供から大人まで、さらに外国人の方にも楽しんでいただける多彩なプログラムを集中的に実施いたしました。平成23年度、第2号となる本ニュースレターでは、東京が文化イベントで盛り上がった、この『東京クリエイティブ・ウィーク』期間中のプログラムの一部をご紹介いたします。

CLOSE-UP PROGRAM①

「TOKYO-FUKUSHIMA!」～音楽家・大友良英氏が語る“FUKUSHIMA”～

～福島と東京を行き来する大友さん自身が「TOKYO-FUKUSHIMA!」～ 「TOKYO-FUKUSHIMA!」に込めた想いとは・・・

「TOKYO-FUKUSHIMA!」とは、東日本大震災によって被災した福島県のさまざまなメッセージを発信するために音楽家・大友良英、遠藤ミチロウ、詩人・和合亮一によって開始された「プロジェクト FUKUSHIMA!」と連携して、東京から福島を発信するアートプロジェクトです。東京と福島の人的／文化的な交流を目的として主に4つのプログラムが実施されました。

福島から招いた演奏家と一般参加者を合わせた、約300名の巨大オーケストラによる演奏、代表メンバーによるシンポジウム、そして大友良英、七尾旅人、遠藤ミチロウの3名のアーティストによるライブ、8月15日(月)に福島で開催された「フェスティバル FUKUSHIMA!」で実施したプロジェクト「福島大風呂敷」の写真や映像の展示。

これらのプログラムを通して、ありのままの福島を発信した、本プロジェクトの中心メンバーである大友さんに「TOKYO-FUKUSHIMA!」の意義や、



文化が持つ可能性についてお話を伺いました。

福島以外から FUKUSHIMA! を発信したい

—「プロジェクト FUKUSHIMA!」をされている中で、今回「TOKYO-FUKUSHIMA!」というプロジェクトをもう1つ立ち上げられた理由は何でしょうか？

吉祥寺周辺でアートイベントを開催する TERATOTERA から今年是一緒に何かまいしようとお話をいただいたときに、丁度、東日本大震災が起こったのがきっかけです。福島の中から発信しているだけではなく、福島以外からも発信する必要があるとは思っていました。

東京と福島を同じ土俵で考えてほしい

—「TOKYO-FUKUSHIMA! LIVE!」では、福島のことを考えられたのですか？

東京では、福島で起こっていることが現実から切り捨てられていっているのを感じるけど、実際は東京にも既に大きな影響が出ているし、全然他人事ではないのです。そういう意味で、東京の人も福島の人々と同じ土俵で考えていけるようになるようになればいい。でも、音楽はそれを伝えるためにあるのではなくて、音楽はあくまで

音楽なんです。僕には、福島の人々の心の代弁を音楽でしようという気持ちは1ミリもありません。会場の吉祥寺美術館では、8月に福島で行ったイベントで使った大風呂敷が飾られていたり、七尾旅人が福島にインスパイアされた歌を歌ったりした。福島との関連は見る人が考えてくれば良いと思っています。

福島の人にも招いて行われたオーケストラ

—オーケストラ、シンポジウム、ライブ、ドキュメント展示と4つのイベントを通じて、印象に残ったことはありますか？

オーケストラは、人が3千何百人と集まってくれて、とても面白かったし、可能性も感じました。会場にはプロもアマも関係なく、たくさんの方がいて、演奏の前後には会話が生まれるというのは、とてもいい状況ができたなと思いました。ステージはなくて、それは自分たちで設定すればいいし、お客さんと演奏者という枠組みも通常の演奏会に比べたら全然なくて、そういう意味では一番印象に残りました。

大友さん自身が“TOKYO-FUKUSHIMA!”

—「TOKYO-FUKUSHIMA!」というプロジェクトの今後を何か考えられていますか？

前回のライブで終了という認識ですが、自分が東京と福島を行ったり来たりしているので、僕自身が“TOKYO

FUKUSHIMA”なんです。僕の今後の活動が全てということだと思っています。この名前を使って今後やるかどうかは、未定ですけどね。

報道されない福島のリアルを伝えたい

—福島の人々の声をどのように、何を届けていきたいと思われていますか？

科学や、政治、報道などの専門家ではないので、自分たちができること、人々の気持ちに寄り添い、現地の人々の思いを届けたいです。新聞の報道にも、人々はどうな気持ちでいるかということとは出てこない。津波による被害のある地域は報道されやすいのですが、原発の避難勧告も出てないけど、放射線値が高い地域の人たちがどんな思いでいるかっていうのは伝わらないのです。非常にこれは大変な問題で、ただ単に伝えるだけじゃいけないかなと。

ものすごく非人道的なことが、今福島で起きているのに、僕らには解決する策が現時点ではあまりないのです。法的にどうこうできるような法整備もないし、科学的な解決手段もない。今起きていることをごまかすのではなくて、伝えていくことしか、スタート地点に立てないと思っています。かなり切実で、本当に追いつめられた切羽詰まった状況を今後も発信していければと思います。

「TOKYO-FUKUSHIMA! LIVE!」 イベントレポート

「TOKYO-FUKUSHIMA!」の取り組みの中から、今回は、最後に行われたプログラム「TOKYO-FUKUSHIMA! LIVE!」の当日の様子をご紹介します。

10月29日(土)、吉祥寺バウスシアターにて「TOKYO-FUKUSHIMA! LIVE!」が行われました。大友良英は、ギターとドラムを使い、ノイズを響かせる即興音楽を奏でました。シンガーソングライター・七尾旅人は、宮城や福島に行くようになってできたという未発表曲を中心に5曲程を演奏。福島に住む人々の物語が織り込まれた歌詞は、その情景が目に浮かぶようで、切々と心に響きました。ザ・スターリンの中心人物だったパンク歌手・遠藤ミチロウは、原発への怒りをストレートに表現した曲、原発の汚染濃度の高い二本松で暮らす母を想った曲などを披露。ギター一本と力強いヴォーカルは、とても生々しく、心の底から精魂を込めて吐き出されている歌が会場の空気を飲み込みました。

会場に来ていたお客さんは、「七尾旅人のファンなので来たのですが、福島に涙がでました」、「分かりやすく言葉にすることはできないもの、普通の気持ちではない感じの音楽をそれぞれのスタイルで演奏していたと思う」と様々な感想を話してくれました。また、「TOKYO-FUKUSHIMA!」のオーケストラを観てライブに来たという女性は、「オーケストラがとても良かったので、今回はライブに友人を連れてきました。日頃から福島のことを考えています」と語ってくれました。



大友良英



七尾旅人



遠藤ミチロウ

CLOSE-UP ②

「F/T 公募プログラム」～今年初めてアジア規模で開催！～

「フェスティバル/トーキョー11」の「F/T 公募プログラム」は、昨年度より新たに立ち上がった、若手アーティスト・カンパニーの自主公演をサポートする取り組みです。今年から公募対象地域がアジア全域まで拡大し、日本全国から約70件、中国、台湾、韓国、インド、シンガポール、マレーシア、タイ、インドネシアなどの国から約80件、計150件の応募がありました。選ばれた11組のカンパニーの中から3作品の演出家の皆さんに今回の演劇に込めた想いや文化の可能性について伺いました。

インタビュー①:

「常夏」ロロ 三浦直之氏

若くして多数の受賞歴を誇る三浦さん。今回の公演では、「夏の思い出」をキーワードに男女の“同時多発的で情報過多”なストーリーを、スピード感のある演出で展開し、会場のお客さんを魅了しました。

—F/T 公募プログラムに参加した理由は何でしょうか？

劇場に入って舞台美術が完成した後、新たにイメージが湧くことがあるので、今回のように長期スパンで取り組める機会を探していました。今回の作品では、個々に物語が進んでいって、劇全体を貫く物語はありません。そのため、どうやってお客さんをノせていくかということを試行錯誤しながらやっています。



—今回の公演に込めた想いは何でしょうか？

—今回の公演に込めた想いは何でしょうか？

“別のジャンルとの接続”ということを意識しました。もちろん、演劇が好きな人にも観て欲しいけど、様々な文化に触れ合う中で、他のジャンルが好きな人にも観てもらいたいと思っています。僕自身、演劇を好きになったのは大学時代に観た演劇がきっかけ。小説や漫画に興味があった僕が演劇を好きになったように、この作品を通して演劇を好きになって欲しいという気持ちがあります。

—震災等で落ち込む日本における文化の役割・可能性についてどう思われますか？

被災地はとても悲惨な状況で、どう考えても今演劇は求められていない。さらに、今はそれを作品にしたいと思いません。現在の状況などは関係なく純粋に作品を作って、やっぱり僕が演劇に感じた面白いという感覚を少しでも多くの人に伝えていきたいですね。それが今後、結果的に被災地の人にも届くようになれば良いと思います。

<三浦直之氏 プロフィール>

1987年宮城県生まれ。ロロ主宰。処女作『家族のこと、その他のたくさんのこと』が、2009年度王子小劇場「筆に覚えあり戯曲募集」で史上初入選を果たし、日本大学藝術学部在学中にロロを旗揚げ。すべての作品の脚本・演出をつとめる。同作品で09年度佐藤佐吉演劇賞最優秀脚本賞を、『ボーイ・ミーツ・ガール』で10年度佐藤佐吉演劇祭ゴールデンフォックス賞を受賞。KYOTO EXPERIMENT フリンジ”HAPPLAY♥”や15mmTOURで地方公演も経験。こまばアゴラ劇場冬のサミット2010、芸劇 eyes 番外編「20年安泰」などの企画にも参加している。

インタビュー②:

「バナ学バトル★熱血スポ魂秋の大運動会!!!!」バナ学園純情乙女組 二階堂瞳子氏

常識・ジャンルを超えた作品で、演劇界の内外から大きな注目を集める二階堂さん。今回の公演では、計算され尽くされたカオス、そして、出演者約45人の圧倒的なエネルギーで、満員の会場に終始衝撃を与え続けました。

—F/T 公募プログラムに参加した理由は何でしょうか？

F/T が日本で一番面白いフェスだから。アジアから強者が集まってくる中で、いろんな人に観てもらって、圧倒して、驚かせたいと思った。

—今回の公演に込めた想いは何でしょうか？

「なんかよくわかんないけどすごかった」と言わせるこ

と。とにかく自分が飽きないことが大事で、お客さんどうこうではなく、オタ芸でもなんでも自分が“使える”、“やりたい”と思ったことを見せつけたかった。出演者全員は「なんかすごい」のために命がけで努力した。まだまだ全然だったけど、実際に「いやーなんかすごかったな」と帰っていくお客さんがたくさんいたのは嬉しかった。

一震災等で落ち込む日本における文化の役割・可能性についてどう思われますか？

どんな時でも、なんかすごいことをしたいと手を挙げるエネルギーが芸術！そのエネルギーが届いて、力になっ

<二階堂瞳子氏 プロフィール>

演出家・振付家・俳優。在学中に地下アイドルとして活躍するなど、現代の日本のサブカルチャーについて深く精通する時代を過ごす。演劇のスタイルが多様化する現代においてジャンルを超えたその創作方法は日本国内でも急速な支持を受け、近年では同世代のみならず1960年～1970年代の学生運動を経験した人々からの支持も受けている。通常50名程度が出演する舞台は一見、無秩序なカオスに見えるが、その作品は独自のメソッドによる規律とルールによって支配され、同時多発的でカオティック、そして氾濫する現代の情報社会を観客に提示する。



てくれれば嬉しいけど、驚きのものにお客さんは反応しない。だから、今の状況とか関係なく、私たちは、とにかく探究していかねばならないと思っている。バナナ学園は、通常の演劇の100倍のエネルギーを使っているし、今後もより多くの人をそのエネルギーで圧倒し続けていきたい。

インタビュー③:

『River! River! River!』ランドステーシング・シアター・カンパニー(中国) ザン・ニンベイ氏



多くの作品を手掛ける傍ら、中国や世界各地を回り、環境問題のプロジェクトにも携わるニンベイさん。今回の公演では、映像

やダンスを織り交ぜながら中国が抱える問題を訴えかけ、国籍を問わず会場に集まった全員が環境問題について考えさせられました。

一F/T 公募プログラムに参加した理由は何でしょうか？

これは中国国内23カ所で公演した作品。日本の皆さんに、今中国で実際に起こっていることを伝えたいと思ったし、また、日本の皆さんと話すことで、日本のことについても知ることができる。お互いの国が持つ問題や情報を共有できる良い機会だと思いました。

一今回の公演に込めた想いは何でしょうか？

実際に中国各地を回った映像や音、写真を使って、私が見たこと、知ったことをより多くの人に伝えたいと思

ました。そして、単に事実だけでなく、特に気持ち、感情の部分、環境問題の破壊的な部分を表現しました。この作品を通して私たちが呼びかけたいのは、環境問題の苦しい現状とこれからどうやって解決していけばいいのかを考えて欲しいということ。

一文字や映像ではなく、なぜ演劇という手法を選んだのですか？

もちろん、演劇がこういった問題を伝える唯一の手段であるとは思っていません。しかし、私にとって演劇が最も得意な手法であるし、他の手段より強く訴えることができると思っています。演劇はコピーが不可能なもので、ひとつひとつの公演を非常に大切にしています。その甲斐あって、これまでの国内の公演では、お客さんに感激を与えることができました。演劇を通して、伝えていくのは簡単なことではありませんが、今後、機会があれば日本はもちろん中国と関係のある様々な国で公演を行い、少しでも多くの人に中国で起きている問題を知って欲しいと思っています。

<ザン・ニンベイ氏 プロフィール>

1972年貴州省水城県生まれ。Nanjing Normal Universityで美術を、北京のCentral Design Academyにて美術史を、イギリス・エジンバラのQMUCにて演劇を学び、現在は上海を活動拠点にしつつランドステーシング・シアター・カンパニーの芸術監督を務める。演出家・作家・プロデューサー・役者として20作品以上に携わり、公演回数は250回にも及ぶ。

「東京クリエイティブ・ウィーク」期間中のその他プログラムレポート

10月20日(木)～10月30日(日)の11日間開催された「東京クリエイティブ・ウィーク」。期間中、東京文化発信プロジェクトが展開するフェスティバル、キッズ・ユース、東京アートポイント計画の各事業分野で様々なプログラムが都内各地で集中的に開催されました。主なプログラムレポートを以下、ご紹介させていただきます。

■日比野克彦×加藤種男 トークセッション



「東京クリエイティブ・ウィーク」初日の10月20日(木)、スペシャルプログラム「FUTURE SKETCH BOOK」のスーパーバイザーである日比野克彦さんと、東京都

歴史文化財団エグゼクティブ・アドバイザーの加藤種男さん、そして特別ゲストにタレント・モデルのはなさんを迎えたトークセッションが開催されました。トークは、主に一般の参加者と様々なアーティストが未来を描いていくワークショップ「FUTURE SKETCH WORKSHOP」について展開。イベント前に行われたワークショップに参加したはなさんは「毎週、東京の街を散歩

しているが、次回からは東京の明るい未来を想像しながら歩き、その想像した世界をみんなと一緒にどうしていけるのかを話してみたい」など実際に参加してみたの感想を語ってくれました。また、加藤さんは、この取り組みの意義を、「プロの画家が描いたものを一般の人が観賞するというだけでなく、今回の取組のように、それぞれが自分の夢を自由に表現し、それをみんなで楽しむというのはとても面白い」と評し、日比野さんは「昔はこんな未来になったらいいなと、未来の絵を描いてみる時間があった。最近ではそういう機会もなく、呼びかける人もいない。我々アーティストやクリエイターが呼びかけて、そういう時間を作ろうというのがこの取り組みの目的」と自らの経験も交えながら、未来を自由に描くことの重要性を熱く語り、会場に集まった参加者は最後までその内容を真剣に聞き入っていました。

■東京大茶会 2011

10月22日(土)、23日(日)、今年4回目となる「東京大茶会 2011」が浜離宮恩賜庭園で開催され、両日で約6,000名が来場しました。「中島の御茶屋」と「松の御茶屋」での茶席は、一般公募にてすべて満員となるほどの盛況でした。両方の茶屋ともに「潮入りの池」を臨む立地にあり、池への眺望がとても美しく、和服を着こなした茶人の振る舞いなど、時代を忘れるような風情の中、多くの人が本格的な茶席を楽しんでいました。美しい日本庭園の芝生の上では、さまざまな流派による野点や、英語通訳付きのイングリッシュ野点、高校生野点も行われました。外国人観光客や中高生など幅広い人々が、開放的な雰囲気の中で日本の伝統文

化に親しむ機会となりました。観光で訪れた外国人は、「たまたま訪れたが、とても異国情緒を感じるし、素晴らしい伝統だ」との感想。「大先輩の中で、このようにお点前をできるチャンスももらって嬉しい」と制服を着た高校生の初々しい声も聞かれました。



■TERATOTERA 祭り オープニングパーティ&ダンス



「震災復興」、「東京をアートで元気に」という二つのスローガンのもと、10月20日(木)～30日(日)をメイン会期として、JR 吉祥寺駅周辺地域を舞台に開催する大規模展覧会「TERATOTERA 祭り」のオープニングパーティ

規模展覧会「TERATOTERA 祭り」のオープニングパーティ

ィが10月22日(土)に東急百貨店 吉祥寺店屋上で開催されました。イベントでは、KENTARO!!と森川次郎×FROM東京の若手実力派の2組が登場。表現力豊かなダンスパフォーマンスは、会場に集まった200名を超える来場者を魅了しました。ステージを飛び出すKENTARO!!のダンスには「目の前でパフォーマンスを観られて最高です!」との感想も。また、最後には大友良英さん率いるオーケストラがサプライズで登場し、会場の盛り上がりは最高潮に達しました。

■ミュージック&リズム TOKYO KIDS コンサート

10月23日(日)、今年で4回目となる「ミュージック&リズム TOKYO KIDS」の発表コンサートが行われました。一般公募で集まった約400人の子供達は、楽器の製作、演奏の練習、リハーサルを経て本番を迎えました。楽器は、竹を切ったり、削ったりした自分たちの手作り。会場には、アーティストのおおたか静流さんはじめ、和太鼓、沖縄のエイサー、韓国、ブラジル、アフリカのパーカッションの音楽家グループも応援に駆け付けました。1時間半に及ぶ演奏の中、子供達は覚えた3つのリズムとステップを使って、座ったり、練り歩いたりしながら、会場を縦横無尽に使って演奏を行いました。総合演出の田村さんは、「子供とい

うのは多少難解なリズムでも、オウム返しでマネさせるだけでできてしまうものなんです」とのこと。参加した子供達は、「同じリズムでも音の大きさと全然違って面白かった」、「友達と一緒に参加して楽しかった」と、魅力を十分に体感した様子。子供達と音楽家の織りなす打楽器のセッションは国籍年齢、プロ、アマを超え、壮大なグルーブ感を生み出し、秋空に高く響き渡りました。



■ぐるぐるヤ→ミ→プロジェクト 谷中妄想ツアー!!おしゃれ



行われました。町なかに散らばる若手アーティストたちが一風変わった芸術やアート、パフォーマンスをそれぞれのポイントで披露し、参加者を楽しませました。

10月23日(日)、下町の風情残る谷中の町を舞台に参加者が4人1組で妄想しながら巡る不思議なツアー「谷中妄想ツアー!!おしゃれ」が行われました。

書道で4人の妄想を1つのストーリーとしてまとめたり、知恵の物々交換をしたりする参加型アトラクションがあれば、無言で踊ったり、派手な仮装で道に立っているだけのパフォーマーも。出発前にはこれらの妄想に驚かないように、妄想準備体操などが行われるなど、細かい演出も多数用意されており、この日集まった約60名の参加者は「これまで体験したことのない不思議な時間だった。是非また参加したい!」と声を弾ませていました。

東京文化発信プロジェクトとは

東京文化発信プロジェクトは、「世界的な文化創造都市・東京」の実現に向けて、東京都と東京都歴史文化財団が芸術文化団体やアートNPO等と協力して実施しているプロジェクトです。都内各地での文化創造拠点の形成や子供・青少年への創造体験の機会の提供により、多くの人々が新たな文化の創造に主体的に関わる環境を整えるとともに、国際フェスティバルの開催等を通じて、新たな東京文化を創造し、世界に向けて発信していきます。

〈この件の取材・掲載に関する報道関係の皆様からのお問合せ先〉
東京文化発信プロジェクト 広報事務局 担当:村澤・宮島・坂元・村木
〒107-0052 東京都港区赤坂 4-15-1 赤坂ガーデンシティ 18F
TEL: 03-6675-9298 FAX: 03-5572-6065 MAIL: tokyobunka@vectorinc.co.jp